第15回　日本在宅医学会大会　プログラム別　詳細情報

カテゴリー	一般演題口演
タイトル	在宅緩和ケアにおける病診連携の問題点について ～当院における在院日数と麻薬使用開始時期の検討から見えるものと文献的考察～
日　　時	平成 25 年 3 月 31 日　9：10～9：20
会　　場	第８会議室
座　　長	坂本医院　坂本　仁先生
演　　者	立川在宅ケアクリニック　荘司 輝昭先生
企画趣旨	終末期を迎える患者は、痛みが緩和されることと、自分の生活スタイルを保ちながら残された時間を過ごすことができるのであれば、住み慣れた環境での死を望んでいる。そのためには、病院から在宅医療へ移行する時間短縮が重要であり、医療機関の情報共有は、質の高い安心できる在宅医療への基盤となる。しかしながら、病院から在宅医療への切り替えに時間を費やしてしまい、患者の残された貴重な時間を奪っているのが現状である。 今回我々は在宅緩和ケアにおける病診連携の問題点について、当院においての在院日数と麻薬使用開始時期の検討から若干の文献的考察を加え報告する。 方法 当院における平成 23 年度に行った看取り患者の在院日数と麻薬開始使用時期についてカルテベースにより検討した。 結果 当院では平成 23 年度には 179 名（癌 158 名,非癌 21 名）の看取りを行った。癌患者の平均在院日数は 108 日（1～581 日）で、そのうち約 4 割の癌終末期患者が在宅医療に移行後 1 か月未満の短期間で最期を迎えている。 また、在院日数 1 か月未満の癌患者のうち約 5 割が紹介先病院より麻薬は使用されておらず、当院で麻薬使用開始となった。 考察 在院日数の検討では文献報告のある家族が望む「1 か月から 6 か月未満」より短期間であり、在宅で生活をできる期間を延ばすためには早期の病院から在宅への医療の移行が必要と考えられた。また、在院日数短期間癌患者の半数が当院での麻薬使用を開始していることより、ＱＯＬをあげるための疼痛コントロールを積極的に行うことが必要と考えた。 結論 当院の在院日数の検討ではいまだ移行への時間がかかりすぎている。今後在宅緩和ケアにおいて病院職員の在宅医療の現況周知とともに患者・家族への病院での在宅緩和医療の周知説明も必要と考えた。